57

# 「西医学東漸史話」の仮製本について

秦[1]　温信・島田保久[2]
[1]札幌社会保険総合病院
[2]島田外科整形外科医院

「西医学東漸史話」は上・下巻が昭和八年一月二一日、余譚が昭和八年六月十一日に東京本郷の吐鳳堂書店より出版されている。これは西洋の医学が東漸して日本に入って発達していったことを外科の領域から記述したもので、上巻・下巻・余譚をあわせ合計一、三一九頁にもおよぶ大著である。名著「日本医史学」の著者である富士川　游が、〝その名は史話と称すと雖も一個の立派なる医史学的著述として空前のものである〟と絶賛している。

平成十一年七月一日札幌社会保険総合病院所蔵の関場不二彦の蔵書などを北海道医師会に寄託するための「寄託式」が行われたが、その中に含まれていた「北海医報」七二巻に「西医学東漸史話の編纂と刊行に至るまでの所感」という論文が掲載されていた。その中に、「阿蘭陀南蛮金瘡論」と「阿蘭陀流油薬法」および「阿蘭陀療法書」と題する古写本が研究の端緒となった思われる記載が見られたので、これらについて検討した成果を報告してきた。

「西医学東漸史話」上巻の仮製本を共同演者島田が入手しており、第十九回札幌市医師会医学会（平成六年）において紹介している。この仮製本には表紙の見返しの他三四頁にわたって書き込みがみられる。これらは本来訂正すべきと著者が考えたもの思われるので、これらの訂正箇所について検討した。

まず「表紙見返し」には、

〝昭和七年十一月二十三日於麻布潜龍楼　理堂道人観

表紙は猶厚くする事

表紙の「見返し」蘭花を刷出す（る）こと

背表紙　金字にて

「包装函」化粧函とも云　三部程「隅皮」にて美装の事

又　見返しは卵黄紙とすること〟

とあり、出版社への注文と思われる。実際、出版されたものは「蘭花」、「金字」、「卵黄紙」など色褪せているが、その通りになっている。

出版されたものには巻末に正誤表がついており、

”第三九五葉十一行

誤　ゴロオウイン

正　ゴロオニン

第四三六葉　二行

誤　シイボルト門人

正　削る“

となっている。

仮製本ではこれらは朱で書かれており、四三六頁の欄外には、

”誤記　昭和七、十二月発見　今や訂正し難し“

とある。

他に朱での書き込みは二箇所あった。

一つは二九九頁の欄外に、

”有馬成甫氏　志筑　盈長（この二字は墨）“

とある。

もう一つは三八九頁の欄外に、

”墓碑銘ノ四句

嗟非常人。好非常事。行是非常。何非常死。“

とあるが、この四句は文中に存在している。

他のものは墨あるいは黒インクでのかきこみであり、出版以後に誤りなどが発見され、書き込まれたものと思われる。